

子どもの「社会的慣習」と「道徳」との概念区別における「状況依存性」の発達の検討

森川 敦子・鈴木由美子

(2006年10月5日受理)

A Study on the development of contextualism in Dictinction between
Social-Conventional Concepts and Moral Concepts

Atsuko Morikawa and Yumiko Suzuki

The purpose of this paper was to clarify the developmental feature of contextualism criterion judgment that Japanese students apply to distinguish social-conventional concepts from moral concepts. An investigation was conducted on students from the ages of 6 years old to 23 years old. The condition of two social-conventional violations and the condition of two moral violations were presented in a questionnaire. The children were asked if the violations were acceptable if the circumstances appeared reasonable. In addition, a groups' response was considered for examination regarding the same scenario. The results are as follows: 1) Understanding of social-conventional concepts become clear during 10 to 11 years of age and 18 to 25 years of age. 2) Changes in moral concepts occur during 10 to 11 years of age and at the ages from 14 to 16 years old, while at the same time changes stabilize between the ages of 14 to 16 years old. 3) Between the ages of 12 to 13 years old and the ages of 18 to 25 years old, students understand criterion judgment of contextualism to social-conventional concepts as relative while comprehending moral concepts as universal. In other words, students are able to differentiate between the two concepts of social-conventional and moral during these two age ranges. 4) Age had no influence in the group's standards of judgment for contextualism.

Key words: morality, social-convention, Turiel, criterion judgment, contextualism

キーワード：道徳性，社会的慣習，チュリエル，基準判断，状況依存性

1. 問題と目的

本研究の目的は、「社会的慣習」と「道徳」とを区別する基準判断のひとつである「状況依存性」の基準判断についてその年齢の発達を明らかにすることである。

道徳性の発達を「前慣習的水準」から「慣習的水準」，「脱慣習・自律的水準」へと一元的に捉えた Kohlberg (1967) に対して，Turiel (1980, 1983) は，「社会的慣習」と「道徳」とはもともと異なる領域概念¹⁾であり，それらは，別々の発達過程を持つものであるとした。

Turiel (1983) によれば，「社会的慣習」と「道徳」は「規則随伴性 rule contingency」「規則可変性 rule alterability」「権威依存性 authority contingency」「一般化可能性 generalization」「状況依存性 contextualism」の5つの基準判断から区別されるとしている。

アメリカにおいては，5つの基準判断のうち，「権威依存性」にもとづく研究が行われている (Smetana & Bitz, 1996)。Smetana & Bitz (1996) は，アメリカの子どもたちが「権威依存性」を基準判断としていることから，教師権威を取り上げ，「権威依存性」の正当性判断について発達の検討を行った。小学5年生，中

学1年生, 3年生, 高校2年生を対象とした研究から, 「権威依存性」の正当性判断は「社会的慣習」においても「道徳」においても全体的に高いことが示された。その中でも, 5年生が最も高く, 年齢によって「権威依存性」の正当性判断が異なることが明らかにされた(Smetana & bitz, 1996)。

日本においても「権威依存性」についての研究が行われている。首藤・二宮(2003)は日本の小学生5年生, 中学生1年生, 3年生, 高校生2年生, 大学生を対象に教師権威を取り上げ, 「権威依存性」の正当性判断に関する研究を行った。その結果, 1)「道徳」では「権威依存性」の正当性判断の割合が高く教師権威を認めていたことが明らかにされた。2)「社会的慣習」では「権威依存性」の正当性判断の割合は低く, 教師権威を認めない傾向にあることが示された。3)正当性判断の割合は, 「社会的慣習」においても「道徳」においても5年生が最も高いことが示された。そして, 学年が上がるにつれて正当性判断の割合は低下し, 高校2年生で最も低くなるが, 大学生で再び高くなることが明らかにされた。これらのことから, 日本の子どもたちは「社会的慣習」と「道徳」の領域で「権威依存性」の正当性判断が異なること, また「権威依存性」の正当性判断には, 年齢的な変容が見られることが明らかにされた。

首藤・二宮(2003)は, 日本の子どもたちは社会的慣習」と「道徳」とを区別する際に「権威依存性」の基準判断に敏感だとする従来の研究結果(首藤・岡島, 1986)にもとづいて, 「権威依存性」を支える権威概念の年齢的発達を明らかにした。

これに対し鈴木・森川(2005)は, 日本の子どもたちは「社会的慣習」と「道徳」とを区別する際に「権威依存性」ではなく「状況依存性」にしたがっているのではないかと指摘した。しかし, 鈴木・森川(2005)は8-9歳においてのみ「状況依存性」の基準判断を用いていると指摘するとどまっている。この点に関して, 森川(印刷中)は, 「重大性」を統制して, 6歳から23歳までを対象として研究を行った。その結果, 日本の子どもたちは「社会的慣習」と「道徳」とを「状況依存性」の基準判断を用いて区別していることを明らかにした。

このことから, 日本の子どもたちは「権威依存性」よりも「状況依存性」を基準判断として用いていると考えられる。したがって, 「状況依存性」を支える概念の年齢的発達を明らかにする必要がある。この点はまだ明らかにされていない。

そこで本研究では, 「重大性」を統制した森川(印刷中)の研究にしたがって, 「状況依存性」を取り上

げた研究を行い, 「状況依存性」についての正当性判断の年齢的発達を明らかにすることにする。

「状況依存性」については, 周りの集団や環境などの文化的, 社会的要因に依存すると考えられる。この点に関しては, 鈴木・森川(2005)の研究から, 8-9歳では「社会的慣習」判断において「状況依存性」の中でも他者との関係性にもとづく基準から判断する傾向も明らかにされている。日本人は欧米人よりも集団主義的(Triandis, 神山・藤原訳2002)であり, 道徳的な判断においても対人関係を優先する傾向がある(中根, 1967)ということ考えると, 「状況依存性」の判断に文化的, 社会的要因である集団主義思考が作用している可能性が考えられる。そこで, 本研究では集団主義尺度と「状況依存性」の正当性判断との相関を検討し, 集団主義的思考が「状況依存性」判断に影響を与えているかを明らかにする。

2. 方法

被験者

被験者はH県内の6-7歳(92名, 男45女47, 平均年齢7.24), 8-9歳(122名, 男65女57, 平均年齢8.97), 10-11歳(99名, 男49女50, 平均年齢10.9) 12-13歳(102名, 男46女56, 平均年齢12.76), 14-16歳(140名, 男62女78, 平均年齢15.47), 17-18歳(53名, 男31女22, 平均年齢17.59), 18-25歳(69名, 男20女49, 平均年齢20.83)の小学生, 中学生, 高校生, 大学生677名。

課題

先行研究及び予備調査²⁾から「重大性」が同様に高いとされた「社会的慣習」2課題, 「道徳」2課題を抽出し, 「重大性」の統制を図った。本研究に用いた課題は「社会的慣習」が1)公園にゴミをちらかす, 2)赤信号で渡る, 「道徳」が1)人に砂を投げる, 2)人の嫌がることを言うであった。

「状況依存性」の正当性判断

「理由があれば逸脱行為をしても仕方ないときがあると思うか」について「仕方ないときがある」「どんなときでもしてはいけない」の2件法で回答を求めた。

集団主義尺度

ヤマグチ・クールマン・スギモリの集団主義尺度(吉田, 2001)14項目の中から, 児童が回答し易いと思われる7項目を抽出し, 集団主義尺度の質問項目として設定し, 「とてもそう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「全然そう

思わない」の5件法で回答を求めた。集団主義尺度の質問項目は以下の通りである。1) 友人集団の仲間が望むように行動する必要がある。2) 多数の人の意見に合わせて自分の意見を変える必要はない。3) 自分の友人集団の決定を尊重する。4) 友人集団の仲間と意見の不一致を生じないようにする。5) 友人集団の仲間がどう思おうと、自分のやり方でものごとを行う。6) 自分の友人集団でも、間違っていると思ったらそれを注意する。7) 友人集団の仲間へ支持されなくても、自分の意見を変えない。

手続き

集合調査法による調査を行った。小学生と中学生については調査者が課題と質問文を読み上げ、被験者が一斉に回答する形式で行った。なお小学1, 2, 3年生については、課題の場面を理解しやすいよう図版も示した。高校生と大学生については各自のペースで回答する形式で行った。調査の所要時間は、10分～45分程度であった。

3. 結果

「状況依存性」の正当性判断

逸脱行為に対して「理由があれば逸脱行為をしても仕方ないときがある」を1点、「どんなときでもいけない」を0点として各被験者の4課題の個人得点を算出し、年齢段階別、領域別に整理した。表1は、「状況依存性」の正当性判断の平均値と標準偏差を年齢段階別、領域別に示したものである。

表1にもとづいて、年齢段階(7)×領域(2)の分散分析を行った結果、年齢段階と領域の交互作用効果が有意であった($F(6, 642) = 6.06, p < .001$)。「社会的慣習」($F(6, 1284) = 15.71, p < .001$)、「道徳」($F(6, 1284) = 6.26, p < .001$)に年齢段階の単純主効果が見られた。

多重比較(Ryan法)の結果、「社会的慣習」領域

においては、6-7歳と8-9歳は、12-13歳、14-16歳、17-18歳、18-25歳よりも低かった($p < .05$)。18-25歳は6-7歳、8-9歳、10-11歳、12-13歳、14-16歳、17-18歳よりも高かった($p < .05$)。「状況依存性」の正当性判断は年齢とともに高くなっていった。

「道徳」領域においては、6-7歳と8-9歳は10-11歳、14-16歳、17-18歳、18-25歳より低かった($p < .05$)。12-13歳は14-16歳より低かった($p < .05$)。「道徳」領域における「状況依存性」正当性判断は、6-7歳から10-11歳にかけて高くなるが、12-13歳では一旦低下し、14-16歳で再び高くなっていった。14-16歳以降は、年齢的な変容は見られなかった。

領域の単純主効果の検定を行ったところ、12-13歳($F(6, 642) = 8.08, p < .01$)と18-25歳($F(6, 642) = 41.56, p < .001$)で有意差が見られた。12-13歳と18-25歳では、「社会的慣習」領域よりも「道徳」領域の逸脱行為に対して、「どんなときでも逸脱行為をしてはいけない」と判断していた。図1は「状況依存性」の正当性判断の年齢段階別得点を示したものである。

集団主義尺度

年齢段階によって、集団主義的な傾向があるかどうかを検討するために、各年齢段階における集団主義尺度の分析を行った。集団主義尺度については、「とてもそう思う」を5点、「少しそう思う」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりそう思わない」を2点、「全然そう思わない」を1点として被験者ごとに7項目の平均値を算出し、年齢段階ごとに整理した。表2は集団主義尺度の年齢段階別平均値と標準偏差を示したものである。表2にもとづいて、一要因(年齢段階)の分散分析を行った結果、年齢段階の主効果が有意であった($F(6, 646) = 3.28, p < .01$)。多重比較(Ryan法)の結果、12-13歳は8-9歳と10-11歳よりも低かった($p < .05$)。

表1 理由があれば逸脱行為をしてもよいとする判断の年齢段階別、領域別平均値と標準偏差

Turielの発達段階	1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	6段階	7段階
年齢	6-7歳	8-9歳	10-11歳	12-13歳	14-16歳	17-18歳	18-25歳
社会的慣習	0.38	0.33	0.60	0.68	0.84	0.83	1.28
標準偏差	(0.64)	(0.61)	(0.71)	(0.85)	(0.80)	(0.82)	(0.81)
道徳	0.34	0.34	0.68	0.47	0.76	0.76	0.81
標準偏差	(0.58)	(0.68)	(0.89)	(0.68)	(0.80)	(0.82)	(0.78)

注：段階は、Turiel (1983) の「社会的慣習」概念の発達段階を示している。

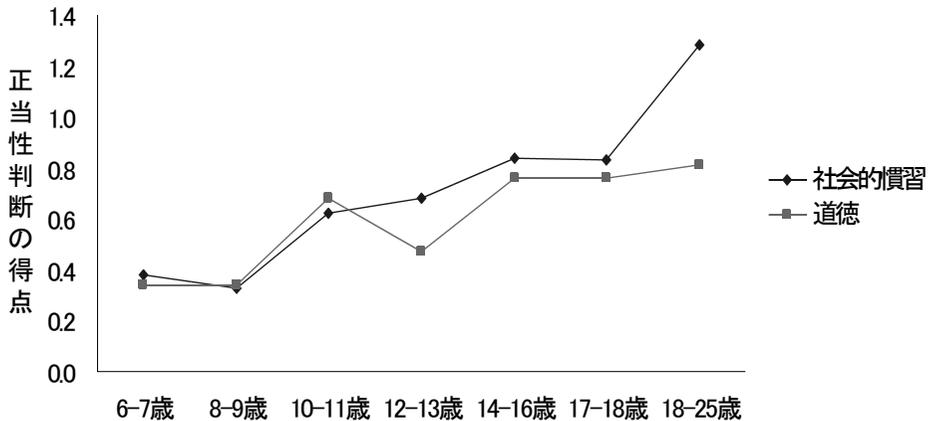


図1 「状況依存性」の正当性判断の年齢段階別得点

表2 集団主義尺度の年齢段階別平均値と標準偏差

Turiel の 発 達 段 階	1 段 階	2 段 階	3 段 階	4 段 階	5 段 階	6 段 階	7 段 階
年 齢	6-7 歳	8-9 歳	10-11 歳	12-13 歳	14-16 歳	17-18 歳	18-25 歳
平均 値	3.09	3.12	3.14	2.87	2.94	3.03	3.09
標 準 偏 差	(0.61)	(0.56)	(0.56)	(0.65)	(0.56)	(0.45)	(0.48)

注：段階は、Turiel (1983) の「社会的慣習」概念の発達段階を示している。

「状況依存性」の正当性判断と集団主義尺度との相関

「状況依存性」の正当性判断と集団主義尺度との関連をみるために、「社会的慣習」領域における「状況依存性」の正当性判断と集団主義尺度との相関 (Pearson) 及び、「道徳」領域における「状況依存性」の正当性判断と集団主義尺度との相関 (Pearson) を検討した。その結果、「社会的慣習」領域では、全年齢段階において「状況依存性」の正当性判断と「集団主義尺度」との有意な相関は見られなかった。また、「道徳」領域でも、全年齢段階において「状況依存性」の正当性判断と集団主義尺度との有意な相関は見られなかった。

4. 考 察

本研究の目的は、「状況依存性」の正当性判断の年齢的発達及び「状況依存性」の正当性判断と集団主義思考との関連を明らかにすることであった。本研究の結果から、以下のことが明らかになった。

① 「状況依存性」の正当性判断の年齢的発達

6-7歳と8-9歳では、「社会的慣習」と「道徳」

における「状況依存性」の正当性判断に差が見られず、「状況依存性」の正当性判断が最も低かった。このことから、6-7歳と8-9歳では「状況依存性」は基準判断として用いられていないと考えられる。

10-11歳では、「社会的慣習」と「道徳」における「状況依存性」の正当性判断に差が見られなかった。「状況依存性」の正当性判断は、6-7歳と8-9歳よりも高かった。このことから、「状況依存性」の基準判断から見た場合、10-11歳ではそれ以前の年齢段階に比べ、「社会的慣習」の理解がより明確になると考えられる。「道徳」については、10-11歳ではそれ以前の年齢段階に比べて、「道徳」を「状況依存性」の基準によって判断していることを示している。つまり、普遍的な「道徳」を相対的に捉えているといえる。

12-13歳では「社会的慣習」よりも「道徳」における「状況依存性」の正当性判断が有意に低かった。このことは、「道徳」をより普遍的なものとして捉えていることを示している。この要因として、12-13歳は「社会的慣習」を否定する年齢段階であることが考えられる (Turiel, 1983)。鈴木 (2005) によれば、「道徳」判断が高まる際には「社会的慣習」判断が影響を与えるという。子どもたちが多様な考え方に触れ、これま

で普遍的だと思っていた「社会的慣習」が一旦否定されることによって、「道徳」概念の奥に含まれる原理に気づくようになるというのである。12-13歳の時期は小学校から中学校へと進学し、子どもたちを取り巻く学校の環境が大きく変わる時期である。鈴木(2005)の指摘に従えば、小学校では学級担任の指導の下、学級のルールや校則などの「社会的慣習」を「道徳」と同様に逸脱してはいけない普遍的なことがらとして捉えていた子どもたちが、中学校に進学し、他校から入学してきた子どもたちや教科担任制に関わる複数の教師たちの多様な考え方に触れ、これまで普遍的だと思っていた校則や学級等のルールが学校や学級に特有な相対的なものであったことに気づくようになる。その際、一時的に「社会的慣習」に対する否定が起こり、それを契機に普遍的な「道徳」原理に目を向けるようになる。その結果、「社会的慣習」の逸脱行為よりも「道徳」の逸脱行為に対して「理由があってもしてはいけない」と判断するようになると考えられる。

14-16歳では、「社会的慣習」と「道徳」における「状況依存性」の正当性判断に差が見られなかった。しかし、「道徳」において「状況依存性」の正当性判断は、12-13歳よりも高かった。このことから、14-16歳では、それ以前の年齢段階に比べて、普遍的な「道徳」を相対的に捉えるようになるといえる。

17-18歳では、「社会的慣習」と「道徳」では「状況依存性」の正当性判断に差が見られなかった。また、14-16歳と比べて「状況依存性」の正当性判断の得点にも差が見られなかった。このことから、17-18歳は「社会的慣習」と「道徳」について14-16歳と変化がないと考えられる。

18-25歳では「社会的慣習」よりも「道徳」における「状況依存性」の正当性判断が有意に低く、「道徳」をより普遍的なものとして捉えていた。この要因としては、この時期に「社会的慣習」と「道徳」との概念区別が明確にできるようになることが考えられる。森川(印刷中)によれば、子どもたちは18-25歳ごろになると「状況依存性」の基準判断から、本来相対的な「社会的慣習」と普遍的な「道徳」との区別が明確にできるようになるという。森川の指摘に従えば、18-25歳ごろには「社会的慣習」と「道徳」との概念区別が明確にできているため、「社会的慣習」に対しては「状況依存性」の基準判断から判断するが、「道徳」に対しては「状況依存性」の基準判断に左右されずに判断するようになると考えられる。

以上のことから、「社会的慣習」の理解は10-11歳で安定するようになるわけではなく、18-25歳で安定するようになることが示された。つまり「社会的慣習」

を明確に理解する転換期が2回あることが明らかになった。Turiel(1983)の発達モデル³⁾では、「社会的慣習」概念は肯定と否定のサイクルを繰り返しながら、3回の転換期を経て発達していくとされている。本研究の結果から、日本の子どもにおいても、「社会的慣習」概念の発達において転換期があることが示唆された。また、本研究では明らかにできなかったが、この転換期と転換期の間に「社会的慣習」への肯定と否定のサイクルが含まれている可能性も考えられる。

「道徳」における「状況依存性」の正当性判断は、10-11歳で高くなり、12-13歳では再び低くなっていた。そして、14-16歳で再び高くなり、それ以降年齢的な変容は見られなかった。このことは10-11歳と14-16歳ではそれ以前の年齢段階に比べて、「道徳」を「状況依存性」の基準によって判断していることを示している。つまり、普遍的な「道徳」を相対的に捉えていることを示している。「道徳」における「状況依存性」の正当性判断が12-13歳で一旦低くなることから、12-13歳では「道徳」を「状況依存性」の基準に依存せず判断することを示している。しかし、14-16歳で再び高くなることから、12-13歳では安定しないということが分かる。14-16歳以降では年齢的な変容は見られない。このことから「道徳」については14-16歳の年齢段階で判断が安定するようになると考えられる。「道徳」の理解も10-11歳で安定するわけではなく、転換期が2回あることが明らかになった。10-11歳で一旦高くなった正当性判断が12-13歳で再び低くなる点と14-16歳以降に年齢的な発達が見られない点で、「道徳」における「状況依存性」の特徴は「社会的慣習」における特徴とは異なることが明らかになった。

②集団主義尺度と「状況依存性」の正当性判断の相関

集団主義尺度の得点は、12-13歳が8-9歳、10-11歳より有意に低く年齢段階による差が見られた。しかし、「社会的慣習」、「道徳」いずれの領域、いずれの年齢段階においても集団主義尺度と「状況依存性」の正当性判断との有意な相関関係は見られなかった。本研究によって、「状況依存性」による基準判断の年齢的発達に集団主義思考は影響していないということが明らかになった。

5. 成果と今後の課題

本研究の結果から、「状況依存性」について以下のことを明らかにすることができた。

まず第1に「社会的慣習」の理解がより明確になる年齢段階は、10-11歳と18-25歳であることである。第

2に「道徳」の理解が10-11歳と14-16歳で変容し、14-16歳で安定することである。第3に12-13歳と18-25歳では「状況依存性」の基準判断から「社会的慣習」をより相対的なものとして、「道徳」をより普遍的なものとして捉えることである。つまりそれぞれの特徴に応じた判断ができるようになることである。第4に「状況依存性」による基準判断の年齢的発達に集団主義思考は影響していないということである。

しかし、以下の点については課題が残った。

第1に、12-13歳と18-25歳では、「状況依存性」の基準判断から「社会的慣習」よりも「道徳」をより普遍的なものとして捉えることが明らかになった。しかし、どのようなプロセスを経て、「社会的慣習」と「道徳」の理解がより明確になるのかについては明らかにすることができなかった。今後は、12-13歳から18-25歳の年齢段階についてより詳しい研究を行い、「状況依存性」判断における年齢的発達の詳細を明らかにする必要がある。また、この発達の変容の中に「社会的慣習」への肯定と否定のサイクルが含まれている可能性が示唆されているが、この研究では明らかにできなかった。この点の解明も今後の課題である。

第2に、本研究では「状況依存性」による基準判断の年齢的発達に集団主義思考が影響していると想定したが、予想と異なって影響は見られなかった。この点についてはさらに詳細な検討が必要である。

【注】

- 1) 首藤敏元 (1992) 「領域特殊理論-チュリエル」日本道徳性心理学研究会編著『道徳性心理学 道徳教育のための心理学』北大路書房, pp.133-144.
首藤 (1992) によれば, Turiel の提唱する「領域特殊理論」では, 「道徳」「社会的慣習」「個人」の3つの領域があるとされ, それらはそれぞれ別々の発達過程をもつ, 質の異なるものとされている。本稿では道徳教育という立場から「道徳」と「社会的慣習」を研究対象として取り上げている。
- 2) Turiel, E. (1983) *The development of social knowledge morality and convention*, Cambridge University Press. Turiel (1983) の理論から「社会的慣習」及び「道徳」の逸脱行為とされた40課題のうち, H 市内公立小学校1年生42名, 3年生36名, 5年生45名及びH大学生121名を対象に予備調査を行い, 「重大性」が同様に高いとされた4課題を抽出した。
- 3) Turiel (1983) は「規則随伴性」の基準に基づいた7段階の「社会的慣習」概念の発達モデルを示し

ている。Turiel によれば, 「社会的慣習」概念は, 第1段階 (社会的均一性を表現するものとして慣習を肯定する段階, 6-7歳) から, 第2段階 (社会的均一性を表現するものとしての慣習を否定する段階, 8-9歳), 第3段階 (慣習を規則や権威者の期待に沿うものとしてとらえ, 規則や慣習を肯定する段階, 10-11歳), 第4段階 (慣習を恣意的なものとしてとらえ, 規則体系としての慣習を否定する段階, 12-13歳), 第5段階 (慣習を社会の統一性を保つためのものとしてとらえ, 社会のシステムに媒介された慣習を肯定する段階, 14-16歳), 第6段階 (慣習を社会的な基準としてとらえるが, 慣習それ自体は社会的システムが適切に機能するための必要条件であるとは考えず, 慣習を否定する段階, 17-18歳) を経て, 第7段階 (社会的慣習は, 社会的相互作用を円滑にするためにあると考え慣習を肯定する段階, 18-25歳) へと「社会的慣習」への肯定と否定とを繰り返しながら発達していくとされている。

【参考文献】

- Kohlberg, L. (1967) *Essays in moral development*. Vol. *Essays in the philosophy of moral development*. San Francisco: Harper & Row, Vol.1.
- 森川敦子 (印刷中) 「子どもの『社会的慣習』と『道徳』との概念区別における基準判断の検討」『道徳教育方法研究 第12号』日本道徳教育方法学会
- 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係-単一社会の理論』講談社現代新書
- Smetana, J. G., Bitz, B. (1996) Adolescents' conceptions of teachers' authority and their relations to rule violations in school. *Child Development*, **67**, 1153-1172.
- 首藤敏元, 二宮克美共著 (2003) 「教師権威の概念化に関する研究」『子どもの道徳的自律の発達』風間書房, 212-231.
- 首藤敏元・岡島京子 (1986) 「子どもの社会的ルール概念」『筑波大心理学研究 第8号』, 87-89.
- 鈴木由美子 (2005) 「児童の道徳的発達における『道徳』判断と『社会的慣習』判断との相互関係-「道徳」判断への「社会的慣習」判断の影響を中心に-」『道徳教育方法研究 第11号』日本道徳教育方法学会, 41-50.
- 鈴木由美子・森川敦子 (2005) 「児童における『社会的慣習』判断の基準に関する一考察」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部 第54号』, 65-71.
- Triandis, 神山貴弥・藤原武弘 (編訳) (2002) 『個人

主義的と集団主義』北大路書房

Turiel, E. (1980) The development of social-conventional and moral concepts. *Moral Development and Socialization*, Allyn and Bacon, INC

Turiel, E. (1983) *The development of social knowledge*

morality and convention, Cambridge University Press.

吉田富二雄 (2001) 『心理測定尺度集Ⅱ』サイエンス社

(主任指導教員 石井眞治)

